

南吉詩のこころの旅

石川勝治

「あなた貴方は死といふ事実をまだまじめ真面目に考へた事ことがありませんね」 漱石『心』より

本稿の題名に選んだ「こころの旅」は「冬へB」(一九三九・一二・一五)の初めにあります。

こころの旅のいや果に

あはれ触れくるウスラヒ薄陽よ

自オノづからなる唄もたえ

野末を冬フユのこゑばかり

(全集八・三九六)

そこで心をキーワードとして新美南吉の半田・東京・安城時代のこころの旅を辿ってみます。

〈半田時代〉「詩人」(全集八・三四)は半田中学校の学友会誌「柘陵」の十周年記念号(一九二八・一一・一)に発表した六篇の詩・童謡の一つです。詩作の主題は「闇黒の中に／一点の光を見つける」ことであります。詩歌の先達の「西行、芭蕉は寂しい旅路を辿り、／良寛は世の人の嘲罵の的となり」ながらも、「彼等には芸術と云ふものがあつた」のです。中学三年の南吉も「天地の間から詩趣を見出せば好い」と「詩人の宣言^{註一}」をしました。「裏のきび畑」には「裏のきび畑／月が降りや／青いはつ葉が光ります」(同・八)とあり、青い詩心の始まりです。

心のみられる詩歌を引きましよう。「少年少女ダイアリー」にある詩「小指」(一九三〇・三・七)は次のように始まります。「雨のこまかいこの宵／雨のやうに／やつぱりこまかくふるへる私のこゝろ」(全集十・二四三)すでに繊細な心を眼に見える雨の比喩で表現したのが注目されます。次に「スバルタノート」の「短歌帳^{一九三〇年度}」から四首を読みます(同・六二八―四三三)。

人と居て心のさわぐさがなれば展覧会も見ずて帰れり (一九三〇・五・一九)

朝より心倦みたる吾なるかひばりの声をうるさしときく (五・三〇)

ベチン足袋の洗ひたるをばけさはきて何か心のかろくなりたり (一九三二・二・一四)

心むなし——鉛筆をもてけしごむをちくちくと我つゝきをるなり (二・一五)

半田時代の詩歌は生の不安と倦怠を主調としますが、どの作品にも制作年月日が記されていることから、若い南吉の「その日その日」の生活感情が知られます。それは「短歌帳」の最後にある制作時不明の歌からも分かかります。「この一分も我が一生の一分だ——時計を見つつ思ひたるかな」このことは中学卒業直前の「柘陵」第一二号

(一九三二・三・三二)に発表したエッセー「海から帰る日」の初めて詳しく語られます。

「五年間に通過して来た道、それは今考へたつてわからない。たゞわかるものは今の心だ。五年の最後に到達した心だ。人の心ではない。自分の心だ。(中略)私の生活は私の生活。私の心は私の心。あなたの生活もあなたの心もあなたのものだ。」(全集二・四〇二)

これから日々の生活の「今の心」を表現することが、創作の原理となります。南吉作品に生涯を通じて日付のあることの大切さが理解されましょう。「海から帰る日」の草稿には「言語と感情」について独自の思想が記されています。

「言語は不完全なものである。私達が用ひてもよい言語がどれだけあるか知らないが、或一瞬の私の感情をさえ完全に表してくれる言語は一つもない。」(全集十・四九六) これは二年前の「昭和四年自由日記(二月十四日)」にある次の断想から発展したものです。「言語は、人間の感情の、何万分の一をも表現し得ない事を知った。」(同・六九) この言語観から「さみしい」という一瞬の感情を、詩人が生涯を通して表現し続けた理由も知られます。

南吉は中学を卒業するころ英国の童話集を読んでいて、本の裏見返しに「一九三〇、一二、二、私の童心よ、ほろびずにあれ」と書きました(全集別巻一・四三七―三八)。そして一九三二年四月から母校の半田第二尋常小学校に勤めて二年生を担当します。その時の「代用教員の日記」には子どもたちの童心が記されています。四月二日「児童達、白紙だ。何物も心にかまへてゐなくて、新しく来た私に接してくれる。まつたくうれしい。中学校とはてんで違ふのである。」(全集十・五〇六) 四月四日「黒板をぬぐふのを忘れて来てしまつて、次の時間に行つて見ると、上の方に字が一行消さずに残してある。彼等は、背がたりない残して置いたのである。私は『ははあ』と思つた。(略)『ははあ』と思ふと、私の心にうれしい感激が波うつて来て、私は涙を流したくなつた。子供の一人一人をし

つかりと抱いて——。」(同・五〇九) このような子ども心に触れて明るい童謡が作られました。

この年一月に復刊した「赤い鳥」の五月号に初めて「窓」が北原白秋選で掲載されます。「窓をあければ／風がくる、風がくる。／光つた風がふいてくる。」(全集八・一四) 続いて「ひかる」が佳作で載りました。「せんせいのかほひかるんだ。／にこ／＼としてひかるんだ。／／こうていのこゑひかるんだ。／みんなのこゑがひかるんだ。」(同・一五一六) これらの詩行には光の世界に心を開いている青年教師の姿が反映しています。

代用教員の勤めの間に初恋の女性宛に書かれた十通の書簡が公表せられました^注。六番目の手紙には次のよう
あります。

「(前略) Mさん、今、僕は告白する。(中略) 僕は、小さい時に、母親を失くした。僕は小さい時から、愛のめぐみをうばはれて了つた。僕を愛してくれる者は、誰もなかつた。僕自身以外には。小さい時から、そんなだつた僕には、すべての人が僕の敵だつた。ある人々は僕の味方になつてくれた。けれど、その人たちも、おしまひには、白い目で僕をはねのけてくれた。それは、私の頭の中で一つの概念みたいなものを建築させてしまつた。その概念があなたに対しても心から信じてほしい筈のあなたに対してもすつかり消えて行つてくれなかつた。(下略) 一九三一・七・二三夜 正八拜 僕の恋人Mさまに、」(六〇頁)

これは率直に告白された南吉文学の原体験を語るものです。四歳で遭つた実母の死から受けたトラウマの深さが知られますが、この負の原像から多くの詩が創作されました。手紙文の二日前に半田中学の親友久米常民に宛てた書簡があります。

「僕は、現在、つかれきつている。一つの平凡な恋愛が、僕を、やたらに、たたきのめす。僕はたたかれ通しだ。体が痛い。ナイフで研いだ様な鋭い力が、今の僕から出て来ない^注。」

南吉はこのように心の闇を打ち明けられる友がいたのは幸せでした。

〈東京時代〉 一九三三年十二月二七日、異聖歌の勧めで信州の旅をして帰郷しました。それを伝える「赤い鳥」の友歌見誠一宛の書簡からも心の旅が知られます(一九三四・一・九)。

「白樺と、粉雪と、からまつと、谷底の人家と、あらし(山から木を迂り落す道)と、そりと下駄のスケートと、諏訪湖の波音と、山の星の美しさ」と、太いつららと灰色の空と―限りなく美しい高原の冬に、心を針のやうにとがらし、感じ、悲しみ、わびぬれ、よるこび、明るみ、私は渡鳥のやうないたいたしく小さい魂をともして旅をしたのでした。(全集十二・四二七)

旅の前後に『手袋を買ひに』が創作されたが、「パン粉のやうな粉雪」(全集二・二六二)の景色が似ています。この年六月に書かれた最初の童話論「外から内へ―或る清算」には次のようである。「外に求めず、内にさぐらう。昆虫の客観を棄て、昆虫の主観を持たう。」(全集九・二五八) 諏訪湖の波音を聞きながら、詩人の眼は次第に冬の美しい外界から内なる心の世界へ向けられます。「心を針のやうにとがらし」て感じ、「渡鳥のやうないたいたしく小さい魂をともして旅をした」のですから、すでに新しい抒情詩のうまれる詩心が感じられます。

一九三四年の「冬休みに、まが峯好君と結婚するといふ噂を聞いた時、味つた苦しさ」(全集十一・三九)とあります。この苦悩から「貝殻」と「葬式」が制作されました(一九三四・十二・三三)。「貝殻」には「誰もその音をきかずとも、／風になしく消ゆるとも、／せめてじぶんを／あたためん。」(全集八・四五八)とあり、詩人は自分自身に語りかけています。この内的独白から叙情詩が始まり、同じ日に作られた「葬式」の第三連には次ようになります。「―小鳥よ、空から下りてこい。／―光よ、ここまで射してこい。／―ここに、こどもがねむつてる。」(同・四六二) 死のモチーフが発展して「墓碑銘」(一九三五・八・三二)の初めの「この石の下に眠つてゐるのは

／お前達の仲間の一人だ」(同・二〇四)となります。

五九行の長い詩には、人間の「憎しみと詐りの言葉」と小鳥の「よろこびと悲しみの純粹な言葉」とが対比されています。後者こそ詩人の言葉ですが、それだけでは現実と闘うには弱いのです。

やぶれやすい心に／青い小さなロマンの灯をともして／あちらの感傷の海へ／またこちらの幻想の谷へと／彼は逃げてばかりゐた／けれど現実の冷たい風は／彼の青い灯を消さうとした／そこでたうたう危くなつたので／自分でそれをふつと吹きけし／彼は或る日死んでしまつた。」(同・二〇五)

前日の詩「去りゆく人にも」「二人の間の小さな灯を——／：／そつと吹きけさう」(同・一九〇)とあります。

詩作の背景は一九三五年三月二五日の「遠藤峯好氏訪問記」から知られます。「僕は例の僕の心の複雑なことを根據にしてなるべく³が他家へいつてくれた方がお互のために幸福であるといつた。」(全集十一・四二)そして二八日、二九日には中学の同級生松井榮一を訪ねて次のような対話をしました。「ゲートルは一つの作品でそれまでの自己を清算したといふ。(松^{注4})」「つきつめて死にたいと思つた時、遺書を書いて見ると一時気持ちは救われるものだ。

(私)(同・四三) 南吉は自ら招いた危機を創作によって浄化し、自己を救済しようと願いました。それでも相思相愛でしたから、詩人が負つた心の傷の深さは、この年一月二四日(東京外語四年二期授業終了日)の詩「わが靴の破れたるごとく」(全集八・二二―二二)から知られます。

わが靴の破れたるごとく

わがころまた破れたり

青やかに美しかりし

かの若き日の感傷は乾からび

今ははや

まことにいたみ凋みたる

かなしき傷痕のみ

その破れたる心抱きて

今宵また氷雨しみらなる

暗き街々をさまよへば

わが靴は心とともに

憐れに貧しく

しみしみと泣くなり

十三行の中に心の詩語が三回あって、若い詩人の感傷性は極点に達します。同じ日の「破れたる洋燈に」も「あはれびの入りたる洋燈よ／汝はまこと若き日の夢を失ひし／傷き破れたる心のごとし／あはれ油をそそがんすべもなく」（同・二二四）とあります。ところが次の二五日の「宿をいでて」は将来の夢を語っています。「美しからずとはいへ優しき妻を／愚なりとはいへ／素直なる子与へらる日ありや／いでやそのときこそ／われは愚かなる文学をやめ／営みにはげみ／妻子をいつくしまん／わが心そのとき／いかばかり楽しからむや」（同・二〇九―一〇）

〈安城時代〉 この五年間に南吉詩は独白から対話へと展開します。一九三八年度から始まった安城高女での生徒たちとの交わりと、翌年四月から下宿した安城町出郷（現安城市新田町）での生活から多くの詩が成立しました。初

年度の九月二八日作の詩には学校内での生活がみられます。「薔薇ウバラの」は「詩作ウタると少女等が／叢にひそめば／街のざはめきは／ここにとゞかず」と野外での作文授業です（全集八・一五二）。「花」は担任の一年生の教室で「彼女達は／花といつしよに／今朝は何か明るい美しいもの／やさしい澄んだものも／持つて来たらうウタ。」と少女たちの優しい心を讃えています（同・一五四）。

次の年の二月から九月までに作文教育の成果である生徒詩集全六集が、南吉自らのガリ版刷りで発行されました注6。三月の第二詩集「縁側の針」の終りに新美正八の本名で「合唱」（同・一五九・一六〇）があります。第七連には「私ハ少女達ノコーラスノナカニ／花東ノヤウナ心ヲ抱イテ立ツテキル」とあり、生徒たちとの温かい交流の象徴です。この詩集にある杉浦さちの「先生」には次のようにあります。「（前略）まぶしさうに目を細くして／何を見て居られるのか／考へてをられるのか／うれしさうなお顔。」作文の時間の新美先生の肖像です。

初めの一年は半田から安城まで通勤しました注7。「春の電車」（一九三九・三・三〇）は、二年前の河和小学校での山田梅子との「束の間の幸福」（全集十一・二五七）を回想します。「そこには春の海の／うれしき色にた、へたらむ／そこにはいつも／わがかつて愛したりしをみなをりて／おろかにも心うるはしく われを／待つならむ」（全集八・三三四）退職後の書簡（一九三七・九・二三）でも「われわれは出来たら結婚しよう。（略）結婚してからも出来るだけ愛しあつていかう」（全集十二・四四九）と語りかけています。

回想が南吉詩の重要な要素であることは、新田の大見坂四郎方に下宿して間もない四月一七日の「歌」の成立からも知られます。

「風呂を出て裸でリングをかじつてみるとどうもききなれたメロディーが聞えて来る。野村と近江寿子がうたつたとんとんとろりこといふ子守唄らしい。よくききとどけるために井戸のところまで出て見た注8。（略）ラヂオでうた

つてゐる。うつくしい歌だ。(略) この心の中にしみ入るせん律のよさ。うたといふものは何といいものだらうと思つた。すぐ一篇の純粹な、下手な詩が出来た。」(全集十二・七) ラジオのやさしい歌は、三月に静岡に移つた少女がうたつた子守歌でした。四三行から純粹な詩を読んでみます。

私はちやんと知つてゐた／私達はあまり年が違ふので／私の言葉はあの子に通じないことを／あの子の言葉は私の心にとゞかないことを／だがあの歌を／しみじみあの子が歌つたとき／それはあの子の魂のしんに触れ／私の魂のしんに触れ／それらは一つのリズムをうつつた／それならばあのととき／私はあの子を理解しなかつたと／どうして云えよう／／とんとんとろりこ／とんとろり／美しい子守歌よ、やさしい旋律よ、／私と私の生徒だつたあの少女の／お互の魂を共鳴させえた／不思議なるものよ／私はここに、たまゆらの深さを知り／生命の価値を知り、／この世を悲しくも美しいものに思ふ(全集八・一八七)

生徒とは十二歳の差があり、日常の会話では心が通じなかつたのです。しかし歌によつて互いの魂が共鳴して、深く理解し合えました。こうして一瞬でも命の深さに達して、生命の価値を知りえたことは、この時期の南吉にとつて貴重な経験でした。「我と汝」の出会いから詩人は心が癒されて、教育と創作への新しい力が得られたでしょう。対話がいつまでも続いたことは、教え子が六十年後に次のように語つたことから知られます。

「作文の好きだつた私は、何か詩という新しいことに接しどきどきしたものでした。(略) クラスの皆さんが一人一人の自分の先生像を持つていらつしやることと思います。(略) 今でも安城時代、肩をかしげて、夏は白いシャツの背が少し風でふくらんで、考え深そうな目をして、あの学校の廊下を歩いていらつしやる先生が目には「います。」

この年の端午の節句に南吉は下宿近くの子供たちと遊びました。「逝く春の賦」(一九三九・五・五)には「いまだ住みつかぬ村に／見しらぬ児らと／遊ぶはさみしや／：／やがて夕闇ふかうなれば／それぞれにわが家の／灯のも

とに帰りゆけり／さあれ われはいづちゆかむ／わが魂の帰るかたありや」(全集八・二五九)とあります。灯は幸せな家庭を表す詩語です。十日後の「桑畑の灯」でも糸くる姥と娘と鳩が静かに睦まじく生きていますが、「わたしのころは／漂泊人／疲れたあしで／昨日も今日も／灯のありどを／たづねてゐる」同・二五八)のです。この孤独は「日暮へC」(「哈爾賓日日新聞」一九三九・五・一二)においてより深く表現されます。

「さびしき春の日暮に／とのもにでて見れば／風さうさうと吹きて／さらにさびしや／：／風いづちより来るかと思れば／菜の花畑のはるかより／吹き来るなり／今わがすあしを吹き／ふところにふき／うつるなる心にふき／さらにさらにさびしや」(同・八五十六)

詩人の自画像から谷悦子氏は「南吉が見据えているのは、人間の深層に潜む普遍的な孤独感(魂の帰るかた)であった」と書いています。この詩が新聞に載った日にノモンハン事件(戦争)が起きて満州・モンゴル両軍がハルハ河で衝突し、日ソ両軍の戦闘に発展しました(九月二十五日停戦)。この現実の中で安城時代初の童話『最後の胡弓弾き』(「哈爾賓日日新聞」一九三九・五・一七・二七)が九回連載されて、その八には次のようにあります。

「町の物音や、眼の前に行き交ふ人々が何だか遠い下の方にあるやうに思はれた。木之助の心だけが、群をはなれた孤独な鳥のやうに、ずんずん高い天へ舞ひのぼつて行くやうに感ぜられた。」(全集三・一九二二三)

この文は孤独感を克服する一つの道を示しています。それは心が現実から離れて空間を垂直的に飛翔する超越と言えましよう。高くて広い空間は人の精神を開放させます。想像力による空間内の上昇を支えるものは、「螢へB」(一九三九・六・一二)で詩人が螢と交わす対話から知られます。

「君の祖先が太古神さまから頂いたもの／―つまり、土と草と水だけが君の／すみかだ／ちつとみてゐると君には現在がない。(中略)僕にも太古祖先が神から／受けとつた／あのわづかにして寂しいものしかないのだ／僕にも甘

世紀はない／君と同じ太古の蒼い寂しきがあるばかり／螢よ／君は草むらに光を息づくがよい／僕は蚊帳ぬちにむなしさを息づく」(全集八・三五五―五六)

四二行の詩には「この野道を散歩に來たが／これから一間きりの宿に帰つてゆく」とあり、詩作の場所が知られます。詩には南吉の現代文明に対する静かで強い批判があります。それは螢の蒼い光に導かれて、太古の神と祖先に回歸する道があるからです。心の内に下降して現実の時間を水平的に超越することです。この深い思想の源は、病気で東京から帰郷して三ヶ月後の日記(一九三七・一・二三)にある「光つた太い思想」です。その終りに死んだ人々の世界にいる父祖に帰るとあり、次のように結ばれます。「孤独なくらやみにはいつてゆくといふよりむしろ我々と親しかつた人々のある世界に帰つていくといふやうな安らかな心持がする。」(全集十一・一一五)

こうして南吉文学の基本を成している時空における超越が知られました。それが文学の内面性であることは、三木清の『親鸞』にある文章が参考になります。「超越的なものが内在的であり、内在的なものが超越的であるところに、眞の内面性は存する。^{注12)}」

「螢へB」に「僕には書物があり／言葉がある」とありますが、文学の素材である言語について一九三九年五月八日の日記には次のようにあります。

「言葉がないといふことはその物が存在しないことを意味する。(中略)心“といふ言葉のないとき人間は”心“の存在に気づかなかつた、従つて人間にとつて”心“は存しなかつたのである。」(全集十二・三四)

言葉の多い民族は多くの物を所有していて、文化の程度が高い。個人も多くの言葉の意味を知ること、それだけ精神生活が豊かになり、精神的に多くの物を所有することになる。これから安城時代の言語観は「言語と事物」に重心のあることが知られます。

心の内部での詩作を物によって表現している二つの短詩を引きましよう。「泉へA」(一九三九・一〇・一五)は「ある日ふと／泉が湧いた／わたしの心の／落葉の下に」(全集八・三七八)とあり、「仲間はずれ」(一九三九・十二・二九)にも「(前略)背戸口で／貝殻笛を吹くやうに／私は／げんじつを逃げて来て／こころの裏口で／詩をあそぶ」(同・三九九)とあります。

一九四〇年一月一三日の日記にも詩作のことが記されています。「一日の中の非常に多くの時間を(略)僕は詩の、美の探究につとめてゐるのだ。」「井上に学報の原稿を渡した^{注13}。そんな小さな仕事でもしてしまふと心が軽くなり、羽ばなく。学校を出ると景色が美しく見え詩心が湧いて来た。」(全集十二・一五〇―一五二)この日「冬へC」が成立しました。

樹がねじくれ、／道の背ほねが白い。／いつでも、いつでも、河床のはだかに／鳥の死がいや／茶わんのかけら。／風がびゅうびゅうと／ふきならし、／まんとをまとい、／手ぶくろをはめても／さむい。／ああ、またこんな／こころの季節になった。(全集八・四五七)

これは最初に引いた「冬へB」と同じように、学校から下宿に帰るときに湧いた詩想です。川は安城の町を北から南に流れる追田川で、橋を渡って東へ行き名鉄の踏切りを越えると新田の集落が見えてきます。詩は美の探求として眼にした事物をメタファーに用いて死の実相を描きます。「道の背ほね」「河床のはだか」は斬新な隠喩であり、「鳥の死がい」「茶わんのかけら」も物によって死を暗示します。こうして詩全体が「こころの季節」の心象となります^{注14}。しかし「冬の最後の日暮に」(一九四〇・二・一)は「あしたから春になるといふ／貧しい私の生活も／暦のやうに革まれ」(同・四二六)と新たな希望を語っています。

「泉へB」(一九四〇・六・八)は「この泉の水を汲んでくれ」と水のメタファーで詩の成立と作品へ読み手を誘う

ことを歌います。後の日記(一九四二・四・九)に「ぼくは井戸である。ぼくをとほして水は浄化され、ふきだす。」(全集十二・三五〇)とある簡明な隠喩文を詳しく詩作して詩語の生成を水の浄化に譬えます。

この水は清冽で／ま新しいのだ／無限の青空が／そのはりつめた方寸のおもてに／くつきりうつつてゐるではないか／…／この泉は四方の大きい岩を／じみじみと永い日夜をかけて／絶えずしみとほつて来た水が／一切の汚辱を去り、／みぢんのにぎりもとどめず／今朝ここに充ちたものだ／見てくれ、底の砂粒の一つ一つが／宝石のやうにきらきらしてゐる／塵一つ、枯葉の片^{かけ}一つ／沈んでゐない(全集八・四二七)

南吉が安城にいた頃は、あちこちに泉があったと聞いています。その実見からこの深い思想詩がうまれたのでしよう。「無限の青空が／そのはりつめた方寸のおもてに／くつきりうつつてゐる」は、道元の次の文に通じます。

「ひろくおほきなるひかりにてあれど、尺寸の水にやどり、全月も弥天^{みてん}(注：天全体)も、くさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。^{注15}」そして「永い日夜をかけて／絶えずしみとほつて来た水が／今朝ここに充ちたものだ」は、忍耐強い詩作の営みの表現です。それを仏詩人ポール・ヴァレリーは「棕櫚」の詩で次のように歌いました。「ただに耐へよ、／碧空のもとに耐へよ！／沈黙の粒の一つ一つが／熟れた実となる機会である！^{注16}」しかし詩の読者をヴァレリーは「実の雨が降って／人は争ひ膝まづかう！」と語っていて、詩人は読み手の上にあります。

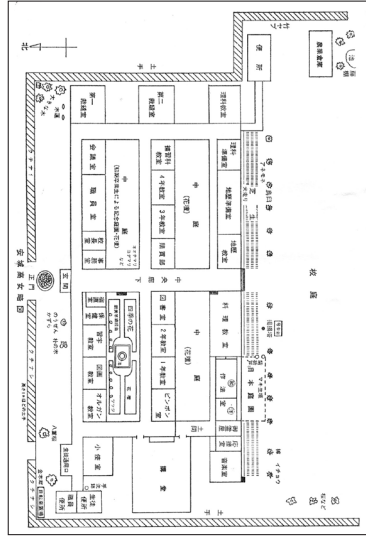
南吉は同じ目線に立って語りかけます。「耳を近づけてきいてくれ」「もつと頬をその表面に近づけて／見てくれ」「さあ／この泉を汲んでくれ／もろ手を出してすくつてくれ」このような親しみ深い命令法に注意しますと、詩人が対話している相手は誰でしょうか。谷氏の「読者に呼びかけている^{注17}」との見方が普通でしょう。筆者もそう思っていました。

年譜にはこの詩が成立した三日後の一九四〇年六月一日に「中山ちゑ、青森県で死亡」(全集別巻一・三六九)と

あります。前年の一月一日の日記に「私の半生の伴侶となるであらうちいこ」（全集十一・四九八）とありながらも、次の年の二月七日には「ちいこから返事が来てゐない。寂しくない。」（全集十二・一八〇）とあり、二人の関係は冷えてしまいました^{注18}。深い沈黙の中で詩人は愛する女^{ひと}に語りかける詩を書いたとも解されます。しかし詩人の実人生と詩の成立は簡単には結びつかず、「泉（B）」においても「体験と創作」についての解きたい謎に出会います。

〔注解〕

- 1 続橋達雄『南吉童話の成立と展開』大日本図書、一九八三年、一三二―一三〇頁。
- 2 新資料紹介「その日その日」I 遠山光嗣 資料の概要には、初恋の女性に宛てた十通の書簡について「果たしてそれが書簡の下書きなのか、それとも日記として書かれたのか判別できないものも多い」とある。新美南吉記念館「研究紀要第八号」二〇〇一年、五一頁。
- 3 中日新聞の二〇一三年六月二二日に「一六歳南吉夢と恋」と報道された。愛知県東浦町中央図書館で五月に同町出身の国文学者久米常民宛の南吉書簡六通が見つかったからである（うち五通は初公開）。引用は「新美南吉記念館だより第167号」平成二五年七月一日発行に依る。
- 4 このテーマについては、拙稿「詩とカタルシスゲート『情熱の三部曲』序説」『長崎県立国際経済大学論集』第一七巻第一号、一九八三年がある。
- 5 かつおきんや『「こんぎつね」をつくった新美南吉』ゆまに書房、一九九八年、一六〇頁より転載。これは南吉が四年間担任した八名の教え子の記憶をつなぎ合わせて成った校舎の見取図である。



6 全六集には生徒詩一一四篇と南吉詩一〇篇が載っている(全集八・一六二―一六五)。第六集「星祭り」の初めに南吉の(終刊の辞)があり、「詩が続かなくて止めるのではない、紙が足りないから止めるのです」と生徒たちに語っている(全集九・一二三四)。

7 『安城と新美南吉』編集・発行安城市

歴史博物館、平成一七年七月、一四頁より転載。

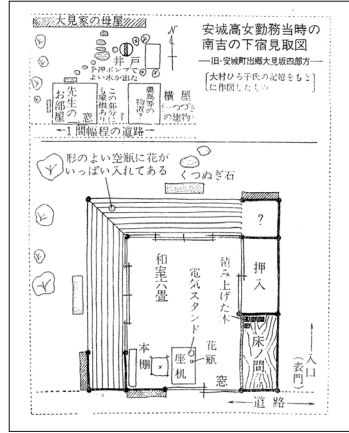
南吉の通勤行程

半田口(発)	7:27
知多鉄道	↓河和行き
知多半田(着)	7:30
徒歩	↓
半田(発)	7:42
国鉄武豊線	↓名古屋行き
大府(着)	8:02
大府(発)	8:07
国鉄東海道本線	↓東京行き
安城(着)	8:22

鉄道省編纂『時間表』
昭和15年10月号による。

8 校定新美南吉全集第三巻月報、一九八〇年、大日本図書より転載。

この下宿は今も南吉当時のままに
保存されていて、昨年（平成二五年）
から一般公開されている。



9 『安城の新美南吉』編集・発行新美南吉に親しむ会、一九九九年一〇月の「卒業生からの手紙」の中にある一九回生堀寿子（近江）の文章。

10 谷悦子「新美南吉―幸せだった安城時代」『南吉が安城にいた頃』編集・発行安城市歴史博物館、平成二十五年七月、七一頁。

11 田中克彦『ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国』岩波新書119、二〇〇九年六月、二頁と略年表一頁。ノモンハン事件の発端の日は、岩波版「日本史年表」（一九九七年、二九〇頁）と「世界史年表」（同）には一九三九年五月十二日としているが、最新研究の田中の五月十一日とした。

12 三木清全集第十八巻、岩波書店、一九六八年、四二頁。

13 南吉は新美正八の本名で昭和十三年度第三学期から昭和十七年度第二学期までの「安城高女学報」の編集発行者をつとめた。



昭和十四年度
第三期
発行所 安城高等学校
印刷所 井上印刷所

昭憲皇太后陛下十二徳御歌謹解

大村重山

歴史博物館蔵。

この学報は南吉在職中の
学校生活を知る上での貴
重な資料である(安城市
歴史博物館蔵)。

- 14 矢口栄『南吉の詩が語る世界』一粒社、平成一六年六月、一二二―二六頁。
- 15 道元著『正法眼蔵(一)現成公案』水野弥穂子校注、岩波文庫、一九九〇年一月、五六頁。
- 16 ポール・ヴァレリー／中井久夫訳『若きバルク／魅惑』みすず書房、一九九五年一月、一七―二頁。
- 17 谷悦子前掲論文、七―二頁。
- 18 帯金充利『新美南吉紹介』三一書房、二〇〇一年五月、一五五―七一頁。

〔作品の引用と略記〕

引用は「校定新美南吉全集全一二巻別巻二」(大日本図書、一九八〇年八月、八三年九月)に依り、「全集」と略記して巻数と頁数を示す。引用文中の旧字体の漢字は新字体に改めた。

(本稿は『デダムシ 新美南吉詩歌集』(春風社、二〇一四年)の解説を大幅に加筆し、注解を付して成ったものである。)

(平成二十六年一月二十九日)

本年度をもって定年退官を迎えられる秦耕司教授に深く感謝して、この拙論を献げます。